



ホイアン旧市街の町並み

Special Features / Engineering's Heritage IV Learn from the wisdom of our predecessors Vietnam

## 生き続ける木造の町並み「ホイアン」 ベトナム・ホイアン

特集  
土木遺産IV  
先人たちに叡智を学ぶ ベトナム



株式会社日本港湾コンサルタント/CALS/EC室/室長  
市場嘉輝  
ICHIBA Yoshiteru

### 1—いにしへの国際交易港

ホイアンはベトナム中部最大の都市ダナンの南方約30km、南シナ海に注ぐトゥーボン川の河口に位置する古い港町である。ホイアンという地名が歴史に登場するのは16世紀末になってからである。

16世紀にチャンパ王国(192～1832年までベトナム中部

から南部にかけての海岸地帯に存在した王国)は北部の李朝大越国(1009～1225年)との抗争で徐々に衰退していった。そして、1570年に広南鎮守となりベトナム中部を治めた広南阮氏はホイアンを拠点として対外貿易に力を入れた。これ以降、ホイアンにはポルトガル人、オランダ人、中国人、日本人が来航し国際交易港としてさらに発展していった。

だが、19世紀末に港は衰退し、18世紀末に建てられた古い町並みと賑わいは残った。現在のホイアン旧市街は海からかなり離れた場所にある。水深が浅そうな川沿いに簡単な岸壁がある姿からは、この町がかつては国際的港湾都市であったことを想像することはできない。

なぜホイアンは、国際交易港としての機能を失いながら、歴史的建造物群が残る活気ある町として今も生き続けることができたのであろうか。



写真1—トゥーボン川から望むホイアン旧市街

### 2—ベトナム中部の歴史とホイアン

ホイアン周辺の歴史は古く、紀元前にまで遡る。古代東南アジアの海洋文化であるサーフィン文化は、紀元前数世紀から2世紀にかけて中部ベトナムで栄えていた稲作を伴う初期金属文化である。ホイアン市内だけでも、サーフィン文化の遺跡が50箇所以上発見されている。

サーフィン文化に続いて、2世紀から中部ベトナム一帯を支配していたのがチャンパ王国である。この時代、トゥーボン川流域には政治的な都としてチャキウがあり、上流には聖地としてミーソン(1999年世界遺産に登録)が築かれ、現在のホイアン付近に経済の中心となる都市があったと考えられている。

8～9世紀頃にはイスラム商人が盛んに中国や東南アジアに來航するようになったこともあり、東西交易の要衝として諸外国と活発に交易をしていたようである。9世紀中頃にアラブ商人が書いた書物には沈香(香料)が輸出されていたという記録が残されており、これを裏付けるかのように、遺跡からは当時の物と見られるイスラム陶器やガラス片が出土している。これらは当時のホイアン地域が中国とインド、アラブを結ぶ交易都市として隆盛し、海のシルクロードの重要な中継地であったことを示すものである。

### 3—国際交易港としての繁栄

ホイアン市遺跡管理事務所によると、ホイアンではかつて人工的な岸壁や物揚場などの施設があった記録はなく、その痕跡も発見されていないという話であった。また、土砂の堆積による港の機能低下を防止するために行われる浚渫工事の記録もないとのことである。こうしたことから、砂州や入り江などの天然の地形をそのまま港として利用していたことが推定される。

当時が描かれた南蛮屏風には、入り江や島陰などの静穏な水域に船舶が停泊し、積荷や乗客を小舟で運ぶ様子が描かれている。往時のホイアンはこのような荷役のスタイルに合った、まさに天然の良港であったようだ。



写真2—ゲンタイホック通りの日本橋近くにあるフレンチクォーター(20世紀前半のフランス植民地時代に建設されたコロニアルスタイルの建物)

こうしてホイアンは、当時の国際航路に近いことや森林資源や鉱物資源などが産出される豊かな後背地を有していたこともあって、速やかに国際的な交易活動へ参入していった。

また、ホイアンには大工や土器作りを専門とする人々の集落があった。これら専門村の出自は北部のタインホア省であり、16世紀後半から17世紀にかけてこの地に移住してきたことが「家譜調査」によって判明している。このことから、ホイアンでは豊かな後背地から得られる沈香や肉桂などの天然資源だけでなく、付加価値の高い加工品なども輸出していたことが想像できる。

### 4—朱印船貿易と日本人町

広南阮氏はホイアンに外国人居住区をつくり治外法権を許すなどの保護を与えた。こうした背景の中で日本人町は誕生する。徳川幕府による朱印船制度が始まった1604年から鎖国政策が実行された1635年までの約30年間に、渡航した朱印船は少なくとも356隻を数える。日本人町には最盛期には数百人の日本人が住んでいたようである。

しかし、幕府による鎖国令により海外渡航が禁止されると日本人町は次第に衰退していった。日本人が住んで



図1—現在のホイアンの町並み





■写真3—当時の朱印船や日本人町の様子が描かれている「茶屋新六交趾国貿易渡海図」(中心部分上側が日本人町で川をはさんで下側が中国人町)

いた痕跡は、来遠橋(日本橋)、日本人の墓、五行山にある寺の寄進者としての碑文などに、今はわずかな面影を残すのみである。

このように日本人町に関する記録は残っているが、町がどこにあったかということはいまだにわかっていない。これにはいくつかの有力な説があり、文献・記録による調査だけでなく発掘調査なども行われているが、位置の特定には至っていない。

## 5—日越交流の歴史を示すシンボル「日本橋」

ホイアンの観光名所に「来遠橋」がある。これは1719年に当時の領主が、既になくなった日本人を懐かしみ「遠くからやって来る友人の橋」という意味で名付けたといわれている。この橋は日本人が建設したといわれていることから「日本橋」とも呼ばれている。橋は幅が約4~5m、橋長が15mほどの5径間の石橋で、木造の屋根が付いている。中央部の上流側には、川の上に張り出してチュア・カウ(橋の上の寺という意味)と呼ばれる小さな寺が造られたユニークな構造をしている。

橋が本当に日本人によって建設されたものであるかどうかは別にしても、このようなエピソードから当時の日本人がベトナムの人々と友好的な関係を築いていたことが偲ばれる。まさに日本橋は、日越交流の歴史を示すシン

ボルではないだろうか。

現在では橋の保全のためにバイクは通行禁止にされ、橋の出入口に高さ30cm程の横木が設置されており、自転車も降りてわたらなければならないようになっている。

この小さな橋のたもとにしばらくたずんでみると、天秤棒を担いだ女性や、自転車を押して渡る人、学校へ行く子どもたちを見かけることができる。このように日本橋は観光名所であると同時に、今でも地域住民の日常生活に使われ続けている土木遺産なのである。

## 6—土砂の堆積が都市機能を変えた

17世紀末の明の滅亡に伴い、多くの中国人たちが広南阮氏治下の中部ベトナムへ移住してきた。ホイアンにおいても日本人に代わって中国人が多数住むようになり(18世紀半ばには6千人の中国人が住んでいたという記録が残っている)、次第に貿易の実権を握るようになっていった。ホイアンの現在の町並みはこの時期以降に中国人によって建設されたもので、現在でもその末裔が多く住んでいる。

ホイアンの町は18世紀後半には西山党の乱によって破壊された。しかしその後、復興し、19世紀の阮朝(ベトナム最後の王朝、1802~1945年)の成立によってホイアン市街地が拡張され、現在の町並みが形成されていった。

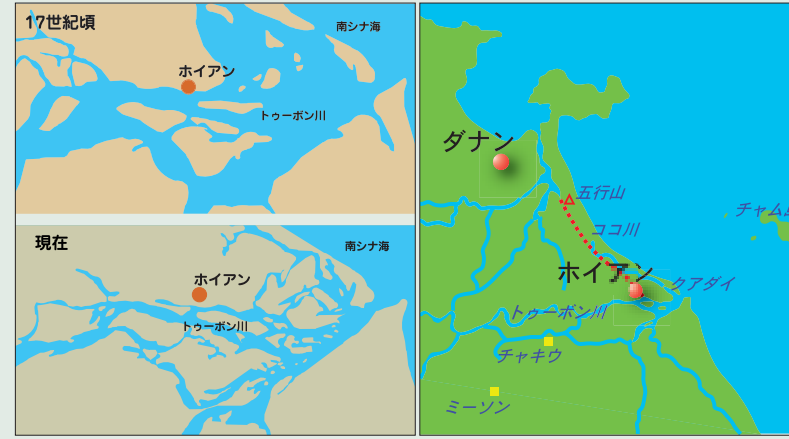
17~18世紀の古地図やその他の地理学的資料によると、過去300~400年の間にトゥーボン川下流の地形は大きく変化していることがわかっている。そして、19世紀になるとホイアンを囲んでいた潟が干上がりはじめ、トゥーボン川河口の土砂堆積も進行していった。この時期になるとダナンとホイアンを結



■写真4—日本人が建設したといわれている来遠橋(日本橋)



■写真5—来遠橋(日本橋)出入口



■図2—ホイアン付近の地形の変遷

■図3—ホイアン周辺の地図(現在)とココ川

ぶココ川も次第に浅くなった。そのため、ホイアンに大きな船舶が寄港できなくなり、港としての機能は次第に失われていったのである。しかしホイアンの商業都市としての発展は続き、土砂堆積による川の南下に伴って、1840年にはグエンタイホック通りが、1878年にはバクダン通りが新たに建設された。

ホイアンの旧市街はトゥーボン川沿いの東西に伸びる3本の街路からなっている。最も川沿いがバクダン通り、次がグエンタイホック通り、そして18世紀に建設されたチャンフー通りである。通りごとに建設された時代を反映した、特徴のある様式の家屋があることもホイアンの魅力である。

19世紀中頃からヨーロッパ列強は東南アジアの植民地化を進めた。19世紀末にはベトナムも南部はフランスの直轄植民地、北部は保護領、中部はフエの阮朝が内政のみを執る保護国となった。

この時期までホイアンはダナンを窓口とした中部最大の商業都市としての地位を保っていたが、ココ川が航行不能になったことと、フランスの割譲地として大型船舶が停泊可能なダナンが発展をはじめたことから、国際交易港としての地位を失っていったのである。

## 7—これからも生き続ける町並み

町の衰退とともに経済的豊かさは失われたが、かつて栄華を誇った中国人の子孫たちは古い家屋を先祖から



■写真6—旧市街ではバイクは日常の足となっている



■写真7—地元住民で賑わう市場



■写真8—カフェでのんびりと時間を過ごす外国人観光客

の遺産として受け継ぎ、手入れをしながら使い続けてきた。この間、町には大きな災害もなく、戦禍も免れ、開発されることもなかった。こうした小さな奇跡が重なり合うことによって、現在のホイアンの町並みが保存されてきたのである。そして、トゥーボン川沿いの東西約900m、南北約300mが保存地区に指定され、約400棟の歴史的建造物を含むこの一帯が1999年に世界遺産として登録された。

こうして、ホイアンの町並みは国際的に注目されるようになり、海外からの観光客も数多く訪れるようになった。かつて国際的な交易港として繁栄したホイアンは、国際的な観光都市として生まれ変わったのである。

ホイアンの旧市街を散策すると、タイムスリップしたような錯覚にとられる町並みがある。そこには遅く生活している人々の喧騒がある。そして歴史的な建造物と環境の中で大勢の人々が伝統的な生活を営んでいる。

世界遺産であるとともに地域住民の生活の場でもあるホイアンの町並みは、これからも、“ミーソン遺跡”、“フエの王宮”に並ぶベトナム中部の重要な観光資源として、地域の人々の生活を支えていくことであろう。

### <参考文献>

- 1)【アジア文化叢書・10】「海のシルクロードとベトナム—ホイアン国際シンポジウム—」日本ベトナム研究会議 1993 穂高書店
- 2)昭和女子大学創立80周年「世界遺産ホイアン展」カタログ 2000 昭和女子大学国際文化研究所
- 3)昭和女子大学国際文化研究所紀要Vol.3「ベトナム・ホイアンの町並みと建築」1996
- 4)昭和女子大学国際文化研究所紀要Vol.4「ベトナムの日本町—ホイアンの考古学調査—」1998
- 5)「近世日越交流史—日本町・陶磁器」櫻井清彦・菊池誠一 2002 柏書房
- 6)「土と文明」合田良實 1996 鹿島出版会

### <取材協力・資料提供>

- 1)ホイアン市遺跡管理事務所
- 2)昭和女子大学国際文化研究所
- 3)名古屋情勢寺
- 4)安藤勝洋 青年海外協力隊

### (写真提供:P22上、写真1、塚本敏行

- 写真2、4、5、市場嘉輝  
写真6、7、8、浅野泰弘  
写真3、名古屋情勢寺蔵  
図1、昭和女子大学国際文化研究所  
図2、参考文献1より  
図3、参考文献2,4より)